大会第一日　10月25日（土）

日本音楽学会第59回全国大会プログラム

9:00	受付開始　6号館教育センターロビー			
	A1：6号館大講義室	B1：6号館110	C1：6号館111	D1：1号館120
9:40	開会宣言			
9:50	井上登喜子（A1-1） 戦前日本におけるオーケストラの曲目選択	秋吉　康晴（B1-1） レコードという記譜法―20世紀初頭における比較音楽学の成立と聴取の変容	平井真希子（C1-1） 聖歌からオルガヌムへ	高橋　英美（D1-1） 歌劇《放蕩児の遍歴》における「狂乱の場」―I.ストラヴィンスキーの狂気の語法
10:35	葛西　周（A1-2） 戦時下の祝祭における「正しい」音楽の提示―『紀元二千六百年』の言説分析を中心に	中村　真（B1-2） 民謡の「科学的」な「規範譜」を求めて―レオシュ・ヤナーチェクによるモラヴィア民謡の記譜法について	萩原　里香（C1-2） レチタール・カンタンドによる音楽表現―カヴァリエーリの作品を例として	長野　麻子（D1-2） シュネーベルの音楽思想―音楽劇の創作にみる身体の表現をめぐって
11:20	三枝　まり（A1-3） 橋本國彦の「歌謡」概念	濱崎　友絵（B1-3） トルコにおけるB.バルトーク	三城　桜子（C1-3） 16世紀末～17世紀初頭イングランドの音高組織―《パーセネィア Parthenia》(1612/13)を例に	西田　紘子（D1-3） 1920年代におけるH. シェンカーの作品解釈―言語連想的ナラティヴとウアリーニエ・ナラティヴ
12:00	昼休み 12:30－13:10　講堂ホワイエ　ランチタイム・コンサート「古典派音楽の黎明―ポルポラ・ヴァーゲンザイル・ハイドン」（国立音楽大学楽器学資料館主催			
13:20	松村洋一郎　（A1-4） 日本における子ども向け作曲家伝―その研究意義と特徴	一柳富美子（B1-4） 音楽と言葉―芸術音楽における旋律とロシア語の統音論	関本菜穂子（C1-4） ジャン＝アダン・セール（1704-1788）の二重根音バス理論	吉江　秀和（D1-4） もう一つの‘ancient’music―the Academy of Ancient Music
14:05	ラウンドテーブルⅠ 音楽の「日本化」の諸相―1920年代から1940年代に至る音楽文化の軌跡 パネリスト：塩津 洋子、山東　功 司 会：戸ノ下達也	ラウンドテーブルⅡ 現代に棲処を得る―伝統芸能の“再文脈化” パネリスト：金光真理子、高松 晃子、長尾　洋子 司 会：横井 雅子	大迫知佳子（C1-5） Fétis, François-Josephの和声理論における二面性について	吉成　順（D1-5） 19世紀のプロムナード・コンサート―ミュザールとジュリアンの音楽の実際
14:50			中藤　有希（C1-6） 18世紀後半～19世紀初頭のフィンランドにおける器楽曲のソナタ形式について―北欧の古典派音楽受容の一様相	朝山奈津子（D1-6） ライプツィヒ・リーデル合唱団（1854創設）によるパレストリーナ作品の演奏―19世紀における「ローマ楽派」受容の一側面
15:35	(ラウンドテーブル終了　16:05)	(ラウンドテーブル終了　16:05)	秋庭佳代子（C1-7） A.スクリャービンの「前奏曲」の意味―和声語法の変遷とその試作的性格	塚田　花恵（D1-7） 19世紀パリの音楽雑誌におけるヴィルトゥオーソ・ピアニスト批評
16:20－17:50	総会　6号館大講義室（90分）			
	（移動）			
19:30－21:30	懇親会　立川グランドホテル			

大会第二日　10月26日（日）

9:00	受付開始　6号館教育センターロビー			
	A2：6号館大講義室	B2：6号館110	C2：6号館111	D2：1号館120
9:30	小石かつら（A2-1） メンデルスゾーンの演奏会用序曲第四番《美しきメルジーネの物語》の成立の詳細	成田　麗奈（B2-1） 20世紀初頭フランスにおける多調性をめぐる論争	高橋　智子（C2-1） M.フェルドマンの反復技法に見られるミニマリスト／非ミニマリスト的側面―S.ライヒとの比較を通して	筒井はる香（D2-1） ナネッテ・シュトライヒャーのピアノ工房における受注生産の実態―ホフマンの書簡を中心に
10:15	上山　典子（A2-2） 「未来音楽　Zukunftsmusik」と「未来の音楽　musique de l'avenir」―1850年代ドイツとフランスにおける両概念の相違	田崎　直美（B2-2） フランス・ヴィシー政権下における、パリ市主催「音楽コンクール」―第三共和政時代からの連続性が意味するもの	日比美和子（C2-2） 無調音楽の分析における“voice leading”手法の比較	大崎　滋生（D2-2） ナチュラルホルンの時代
11:00	高坂　葉月（A2-3） マーラーの交響曲と同時代の評価―受容のフィルターとしてのジャンル	水野みか子（B2-3） GRMにおけるソルフェージュ・ソノールの個と集団について	大西　秀明（C2-3） 秩序と混乱、騙し絵、“めまい”― リゲティのピアノ・エチュード第9番のピッチスペース分析	武石みどり（D2-3） 明治初期のピアノ―文部省購入楽器の資料と現存状況
11:40	昼休み			
12:40	ラウンドテーブルⅢ ワーグナー研究の新たな課題 パネリスト：池上　純一、伊藤　綾、稲田 隆之 司 会：三宅 幸夫	小場瀬純子（B2-4） シューマンの“謝肉祭三部作”における“カーニヴァレスク”	鳥谷部輝彦（C2-4） 興福寺常楽会後朝の歌と楽―舞楽と御遊を中心として	加藤　拓未（D2-4） テレマンのハンブルク時代初期の典礼用受難曲―演奏日の特定とStaatsarchiv Hamburg所蔵A 534/245の受難曲印刷歌詞本の分析
13:25		加藤　幸一（B2-5） シューベルト「即興曲」作品90の和声組織構造の考察―ジェームス・ヘポコスキーによる、「ソナタ・デフォルメ理論」の最新ソナタ理論学説の応	近藤　静乃（C2-5） 伽陀の句型とその旋律構造―『諸経要文伽陀集』を中心に	関口　博子（D2-5） 18世紀後半のドイツにおける民衆の啓蒙と音楽教育―J.A.ヒラーとJ.A.P.シュルツの歌曲集に着目して
14:10	(ラウンドテーブル終了　14:40)	山口真季子（B2-6） ベルリンの新聞評から見るシュナーベルのシューベルト演奏	土田　牧子（C2-6） 歌舞伎十八番という近代	森　佳子（D2-6） オペレッタの歌唱形式に見られる「18世紀的」なもの―クープレとロンド
14:55 15:40 16:25	ラウンドテーブルⅣ J.S.バッハとC.P.E.バッハ―伝承と創造的受容をめぐって パネリスト：久保田慶一、小林 義武、富田　庸 司　会：礒山　雅 (ラウンドテーブル終了　16:55)	ラウンドテーブルⅤ 「世界音楽」再考 パネリスト：伊東 信宏、早稲田みな子、輪島 裕介 司　会：吉成　順 (ラウンドテーブル終了　16:55)		
17:00	閉会挨拶　6号館大講義室			